編集後記　「戦艦エルトゥールル号の翼」

アヴニール労務事務所　所長　柿野元博
http://www.avenir-sr.jp
E-Mail　avenir4you@gmail.com

2 月 12 日、トルコ人海洋考古学者の調査団長が、串本沖で遭難したトルコ軍艦の 5 年ぶりの海底調査の成果を発表しました。
その遭難事件が起きたのは 1 世紀以上前のことです。
この遭難事件を発端とする、信じられない奇跡のような物語が、今からちょうど 30 年前にありました。

1985 年 3 月 17 日、イラクのサダム･フセインは突然、**48 時間**の猶予期限以降、イラン上空を飛ぶ全ての飛行機を**無差別に撃墜**すると宣言しました。
イラン在住者を抱える諸外国は自国民救出の為、救援機を飛ばして次々とイランを脱出しました。
一方、日本。当時は自衛隊機の海外派遣がかなわず、また政府がチャーター機を依頼した日本航空は、安全が保障されないことを理由に労働組合がフライトを拒否。
イランに取り残された在留邦人 215 人は、日本から救援機が来ないという絶体絶命の状況にありました。

しかし、絶望の淵にあった日本人に手を差し伸べた国がありました。**トルコ共和国**です。
まだ約 500 名のトルコ人がイラン・テヘランに残っていたにも関わらず、日本人に優先的に飛行機の席を譲り、飛行機はイランを離陸。それはタイムリミットの約 1 時間前だったといいます。
そして残ったトルコ人は、空路ではなく陸路で命がけのイラン脱出を図りました。
そんな、自国民より日本人を優先したことに対して、国を非難するトルコの人は誰もいなかったそうです。駐日トルコ大使は次のようなコメントをしたといいます。
「エルトゥールル号の借りを返しただけです」

それが今回海底調査のあった、和歌山串本町沖で起きた、トルコの**エルトゥールル号**遭難事件（1890 年）です。
この遭難に際し、当時の串本・大島島民は嵐の中、不眠不休で生存者 69 名の救助、介護、また遺体の捜索、引き上げにあたりました。日本全国からも多くの義捐金、物資が遭難将士のために寄せられたそうです。
そんな**エルトゥールル号**遭難事件のことをトルコでは教科書で子供達に教え、日本に対する感謝の気持ちを語り継いで、ありがたくもおよそ 100 年もの昔の**感動**を**共有**してくれていたのです。
1999 年にトルコ北西部で発生した大地震では、日本は世界に先駆けて国際緊急援助隊を派遣し、緊急物資・無償援助などを行ない、さらに 2011 年の東日本大震災の時には、原発事故の深刻さが明らかになると撤収を始める国が続出する中、トルコが海外勢で最後まで残って行方不明者の捜索活動に尽力してくれました。
感動が共有され次の感動を呼ぶドラマが生まれ、そしてまた共有されることで、信頼が上積みされていく。今やトルコとの間には人種や宗教を超えた強い絆があります。

エルトゥールル号
殉難将士慰霊碑
（和歌山県串本町）
和歌山県 HP より

感動を共有することは、次の感動を生むエネルギーになります。
感動を共有することは、「やりがい」や「誇り」になります。
職場においても感動を共有することは、社員一人ひとりの仕事に対する「やりがい」や「誇り」を高めていくことにつながり、メンタルダウンする人を生まないために大切なことです。
「やりがい」や「誇り」は生きるうえでも、仕事をするうえでも心の拠り所となるものです。
「やりがい」や「誇り」があれば、服務規程に反する行為はきっと起こりにくいはずと思いますし、また多少のストレスがあっても前を向いて乗り越えていけるのではないでしょうか。
しかし「やりがい」や「誇り」は自然に生まれてくるものではありません。仕事の成果をお客様に評価していただいたり、上司や先輩から慰労されたり激励されたりする感動の中で育まれるもの。
社員を育成するということは、そんな社員の気持ちの中の「感動」を育てることでもあります。

それにしても、エルトゥールル号のこと調べていたらトルコへの興味がわいてきました。
今日のランチは**トルコライス**にしよっと。でデザートは**トルコ風アイス**ね。（●^0^●）
注)トルコ料理にトルコライスはありませんから～m(__)m

※参考)「海の翼」秋月達郎 著（PHP 文庫）